



NCAJ

National Camping Association of Japan

National Camping Association of Japan

Camp Meeting in Japan 2020

-第24回日本キャンプミーティング-
-第4回オンラインミーティング-

報 告 書

<期 日> 2020年11月14日

<主 催> 公益社団法人 日本キャンプ協会

<会 場> オンライン

目次

第24回日本キャンプミーティングの開催に当たって.....	
第24回日本キャンプミーティングの軌跡.....	
スケジュール.....	
発表題目一覧.....	
ワークショップ紹介と報告.....	
研究・実践発表簡易抄録.....	

第 24 回日本キャンプミーティング 開催に当たって

第 24 回日本キャンプミーティングが、今年も多くの皆様からのご協力を頂いて開催される運びとなりました。心より感謝申し上げます。

2020 年は全世界がこれまでの価値観を大きく変えざるを得ない未曾有の事態となりました。新型コロナウイルス感染症の拡大は私たちキャンプ関係者にも大きな影響を与えています。4 月 7 日に 7 都道府県に緊急事態宣言が発出されたことを受け、第 1 回の実行委員会ではこの事態に対応するために、とにかく「走りながら考える」ことにしました。ほぼ時を同じくして行っていた日本キャンプ協会の関係者を対象としたアンケート調査の結果から、「キャンプを取り巻く課題」と「今だからこそ感じるキャンプの価値」をとりまとめ、5 月 17 日には日本キャンプ協会関係者（理事、監事、運営委員、都道府県協会関係者）によるプレミーティングを行いました。

そして、第 24 回キャンプミーティングは、コロナ禍の中で急速に普及が進んだオンライン会議システムを活用し、計 4 回のオンラインミーティングを開催することにいたしました。このミーティングが目指すことは以下の 4 点です。

1. 新型コロナウイルス感染拡大に伴う社会状況の中で、「キャンプの実施に伴う課題」と「今だからこそ改めて思うキャンプの価値」について考え、議論し、共有する。
 2. この夏のキャンプ実施について情報を共有する
 3. この夏のキャンプ実施についてふりかえりをする
 4. これまでの成果を総括しながら、2020 年だからこそ見えてきたキャンプの価値を共有すると同時に、社会に向けてアピールする機会となることを目指す。
- 4 回目となる今回のミーティングはこれまでの取り組みをまとめる総決算となります。

まず、この危機は日本だけでなく世界各国で起きています。国際キャンプ連盟 (International Camping Fellowship) の全面的な協力をいただき、世界各国のコロナ×キャンプの取り組みを日本語字幕付きで公開します。ぜひ世界のキャンプファミリーの熱いメッセージをお聞きください。

ワークショップもオンラインの強みを活かし、全国各地の取り組みをそれぞれの場所から体験できるような機会を用意いたしました。若手が企画し、若手が進行するワークショップでは、「オンライン OB 訪問」として、キャンプに関係した仕事に就いている方々に、若手が疑問をぶつけます。録画も公開もしない 1 本勝負です。研究・実践発表も例年通り行います。実践発表はこの夏の事業に関する貴重な取り組みをご紹介します。

パネルディスカッションは、これまでの総まとめとなります。日本キャンプ協会が実施した調査の結果、7割を超える団体が、キャンプの実践を再開していました。今回は3名のパネリストをお招きし、コロナ禍での質の高いキャンプの実践について議論していきます。

Zoomのブレイクアウト機能を用いたオンラインの懇親会も実施します。旧交を温めたり、普段は会えない人と話したり、全国のキャンプ仲間と交流できる時間にしたいと思います。

新型コロナに限らず、気候変動、様々な災害、対立と分断、これからの社会はさまざまな困難が待ち受けているかもしれません。しかし、それは私たちの大好きなキャンプの可能性を広げることにつながるようにも思います。キャンプという「乗り物」に何を載せて人々に届けるか、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。



第24回日本キャンプミーティング実行委員会

委員長 野口 和行

第24回日本キャンプミーティングの軌跡 (3泊4日のキャンプをイメージして企画しました)

日程		実施内容	備考
プレ ミーティング (前泊)	5月17日(日)	日本キャンプ協会の関係者を対象としたアンケート調査の結果から、「キャンプを取り巻く課題」と「今だからこそ感じるキャンプの価値」をとりまとめ共有。	日本キャンプ協会理事、監事、運営委員、都道府県協会関係者対象
第1回 (1日目)	6月6日(土)	海外の団体・組織による新型コロナウイルスへの対策の紹介、実行委員による発題「どうしたらキャンプできるだろう」。	無料 約120名参加
		https://www.youtube.com/watch?v=oF_g_vqoEAM&t=75s	
第2回 (2日目)	7月4日(土)	都道府県キャンプ協会、青少年教育施設、民間団体による、今夏の活動予定と感染対策の紹介。	無料 約80名参加
		https://www.youtube.com/watch?v=ox6VzckIH4	
第3回 (3日目)	9月30日(水)	都道府県キャンプ協会、青少年教育施設、民間団体による、今夏の成果・活動報告と課題点の共有。	無料 約60名参加
		https://www.youtube.com/watch?v=Ti963CdyU-k	
第4回 (4日目)	11月14日(土)	国際キャンプ連盟関係者のスペシャルスピーチ、研究発表、実践発表、オンラインとフィールドを繋ぐワークショップ、若手ワークショップ、質の高いキャンプ再開に向けたパネルディスカッション、懇親会・情報交換会	

スケジュール

10:00	スペシャルスピーチ(字幕付き) ～世界のwithコロナ×キャンプ～				10:00
12:00	John Jorgensonさん(国際キャンプ連盟 元会長)、Jeff Bradshawさん(カナダキャンプ協会 元会長) Ruth Fengさん(Jingle International Education (菁果国際教育) CEO)、Tom Rosenbergさん(アメリカカキキャンプ協会 現会長件CEO)				12:00
	ルーム1	ルーム2	ルーム3	ルーム4	
Time	ミーティングID: 928 6424 2202 パスコード: 576 201	ミーティングID: 870 6415 4341 パスコード: 481 636	ミーティングID: 976 6436 3926 パスコード: 425 545	ミーティングID: 862 4611 6380 パスコード: 328 367	Time
12:55	開会の挨拶・アナウンス	開会の挨拶・アナウンス	開会の挨拶・アナウンス	開会の挨拶・アナウンス	12:55
13:00	実践発表(P-1)	実践報告(P-3)	若手ワーキングセッション 「オンライン0B訪問」	WS:白濱真友さん (一社)セルズ環境教育デザイン 研究所	13:00
13:18			OB①:豊留雄二さん (自然遊びクラブ)		
13:20	実践報告(P-2)	実践発表(P-4)	OB②:鈴木浩之さん (Essential Education Center)	キャンプ、自然体験の 魅力を伝える動画制作の現場から	13:30
13:38			OB③:池田麻梨子さん (東京YMCA)	WS:青木大樹さん (有)南相木ふさとふれあい公 社	13:45
13:40	--	夏の自然体験活動・キャンプ 事業実態調査報告	進行:川島才路さん (筑波大学大学院)	小学生冒険プログラムの現場から	14:15
13:58					
14:00	研究発表(R-1)	談話室	WS:石川大晃さん いこーよ四季冒険部 (アクトインディ株式会社)	WS:内藤明さん りんばな	14:30
14:18					
14:20	研究発表(R-2)	(14:50まで開放)	オンラインとキャンプを つなげる、農業体験の現場から	石垣島のフィールドから、 コロナ禍でのプログラム紹介	15:00
14:38					
14:40	研究発表(R-3)				
14:58					
	ミーティングID: 832 1121 6504	パスコード: 521 264			
15:15	全体まとめ・パネルディスカッション これからキャンプ、こうしませんか? ～キャンプの再開から、質の高いキャンプ実践へ!～				15:15
17:00	<ul style="list-style-type: none"> パネリスト: 小澤 潤平さん (国際自然大学院) パネリスト: 成田 裕さん (ガイア自然学校) パネリスト: 黒田 雅秀さん (山口徳地青少年自然の家) 				17:00
17:15	ミーティングID: 813 3582 2846	パスコード: 576 062			
19:30	懇親会・情報交換会				17:15 19:30

【研究発表】

R-1	新型コロナウイルス緊急事態宣言下における、子どもの余暇の過ごし方について	井上 恵里	14:00-14:18		
R-2	長期自然体験活動が小学生の学校における適応感に及ぼす影響	小澤 孝亮	14:20-14:38	928 6424 2202	576 201
R-3	S小学校セカンドステップを事例として 民間の野外教育団体の組織キャンプにおける プロダクト構造の分析	矢野 達也	14:40-14:58		

【実践報告】

P-1	〈ONLINE×CAMP 空想キャンプ場〉の取組みと今後の可能性について	越前 麻代	13:00-13:18	928 6424 2202	576 201
P-2	コロナ禍でも四季冒険	近藤 みのり	13:20-13:38		
P-3	ろう・難聴児のためのオンラインキャンププログラムの試み デフ・アドベンチャー・キャンプ・オンライン2020	針ヶ谷 雅子	13:00-13:18		
P-4	バーチャルキャンプをやってみよう！	柳下 史織	13:20-13:38	870 6415 4341	481 636
P-5	夏の自然体験活動・キャンプ事業実態調査報告	高橋 宏斗	13:40-13:58		

【ワークショップ】

W-1	キャンプ、自然体験の魅力を伝える動画制作の現場から	講師 白濱 真友さん	13:00-13:30		
W-2	コロナ禍での小学生冒険プログラムの現場から	青木 大樹さん	13:45-14:15	862 4611 6380	328 367
W-3	石垣島のフィールドからコロナ禍でのプログラム紹介	内藤 明さん	14:30-15:00		
W-4	若手ワークショップ 「オンライン0B訪問」	豊留 雄二さん 鈴木 浩之さん 池田 麻梨子さん 川島才路さん	13:00-14:15	976 6436 3926	425 545
W-5	オンラインとキャンプをつなげる、農業体験の現場から	石川 大晃さん	14:30-15:00		

【談話室】

オープンスペースとしてご活用ください。	14:00-15:00	870 6415 4341	481 636
---------------------	-------------	---------------	---------

ワークショップ紹介と報告

「オンライン会場とフィールドをつなげるワークショップ」

- キャンプ、自然体験の魅力を伝える 動画制作の現場から
- 白濱 真友（しらはま まゆ）さん
- （一社）セルズ環境教育デザイン研究所

【キーワード】

動画制作、生物撮影、自然観察、環境教育、生物教育



【ワークショップの内容】

集合イベントができない期間、当所では自宅や近所の公園などでできる自然観察・生物学習をサポートする動画の制作・配信を行ってきました。今回は、自然を伝える動画の事例紹介と合わせて、動画構成、野外・生物撮影のコツ、編集、など動画制作の過程をご紹介します。

【団体リンク（URL）】

<https://cells.jp.net/>

W-1 ルーム 4
13:00-13:30

《報告》

（一社）セルズ環境教育デザイン研究所では、小学生を対象とした生き物学習教室の企画・講師を務めており、日々子どもたちと生物観察・調査・学習等の活動を行っています。

しかしコロナ禍で授業の休講となり、その間子どもたちの学びを止めないため、教室の生徒を対象とした学習ムービーを制作しました。それを機に、様々な生物に関連する動画を作成し YouTube で配信をしています。さらには、環境学習施設の学習ムービーや地域の環境 PR ムービーの作成等、テーマに沿った動画作成の受託も行っています。

そこで今回は、コロナ禍で始めた生き物や自然観察の魅力を伝える学習ムービー制作の取り組みをいかして「自然体験の魅力を伝える動画制作の裏側」についてのワークショップを実施させていただくこととなりました。今回はワークショップの中では、当所が制作した環境・生物学習ムービーの事例や、撮影機材、野外・生物撮影のコツ、動画編集ソフトについてご紹介しました。今回のワークショップでは、これから動画を作成したいと考えられている方のお役に立てるよう、動画を作り始めて苦労した点、失敗した点から、その改善方法に

ついでにご紹介しました。

“野外・生物撮影のコツの紹介”では、野外・生物の撮影をされていて困ることとして「雑音で聞きづらい」「手振れで見えづらい」「生き物が逃げて撮影できない」などを挙げ、簡単な実演を交えて、これらに対する工夫を解説しました。例えば、野外で撮影した動画は、普段はあまり気にならない風、車、人の声などの「環境音」が耳障りになり、解説者の声が聞き取りづらくなることがあります。それを改善するための工夫として、マイクを購入し、三脚に取り付け解説者の近くに立てるなど、単純でありながら重要で真似しやすい撮影のコツを解説しました。また、手振れを防ぐための専門的な道具についてもご紹介しました。

また、“動画編集ソフトの紹介”では、まずは簡単に費用をかけずに動画を作ってみたい方向けに、スマートフォンで使える動画編集アプリの紹介や、実際の編集画面・完成動画の紹介などを行いました。アプリでの編集だけでなく、動画編集が初めての方でも使いやすいPCの有料ソフトについても紹介しました。当所では、普段はPCの有料編集ソフトで編集をしていますが、ワークショップに向けて、スマホアプリでの編集にも挑戦し、使用感や作成動画のイメージをお伝えしました。実際に使用してみて、SNSで動画を発信する際は、PCで編集するよりも手軽にタイムリーに発信することができるスマホアプリの方が使いやすいのではないかと感じました。動画の内容や発信場所に合わせて、動画編集ソフトも使い分けるとより効率的に発信ができるのではないのでしょうか。

今回のワークショップを通じて伝えたかったことは、動画編集は難しいと思われがちですが、初めて動画を作るという方でもちょっとした撮影のコツを知り、適切なソフト・アプリを使用することで簡単に動画を作り発信をしていくことができるということです。最近では、様々なSNSで動画が使用されることが多く、特にYouTubeやInstagramは検索ツールとして用いられることも多くなっているようです。これらの



ツールを使った効果的な広報を行うためにも、手軽に動画を撮影し編集・公開することは必要不可欠になってくることと思います。近年では、多くの動画編集ソフトも登場し、感覚的に編集ができるソフト・アプリが充実しています。まずはワークショップ内でご紹介したものを試していただき、動画制作の一步を踏み出していただけると幸いです。

- =====
- コロナ禍での小学生冒険プログラムの現場から
 - 青木 大樹 (あおき ひろき)
 - (有)南相木ふるさとふれあい公社



【キーワード】

原体験、原風景、地域への愛着、
草の根、Life time Experience

【ワークショップ内容】

「個人事業」や「草の根の活動」を発展させたい方に向けた内容を考えています。本業の傍らでもできるキャンプ運営。組織にとらわれないキャンプ運営。地域貢献としてのキャンプ事業の実践について、事例を交えながら考察したいと考えています。

【団体リンク (URL)】 <https://www.facebook.com/aiki.bouken>

W-2 ルーム 4
13:45-14:15

=====

《報告》

【ワークショップ講師を受けるに至った経緯】

実行委員の渡辺さんより声をかけていただいたことがきっかけです。キャンプ事業の中止や、活動の停止などを余儀なくされている団体が多い中で、弊社での小さな事業(スモールキャンプ)が、なにか今後のヒントになればと思い引き受けさせていただきました。

【ワークショップを実施するにあたって行った準備】

資料の作成、事前のリハーサル、Web 環境の整備等

【ワークショップの中のこだわったポイント】

特に「こだわり」というものはありませんでした。

今回はじめて Zoom ライブにて、一方通行型のワークショップを行ったのですが、私の経験不足により、お伝えしきれなかった点があり、申し訳ありませんでした。

【ワークショップを通して伝えたかったこと】

○小規模キャンプの利点について・・・対個人コミュニケーションの機会を増やせる
・・・感染その他のリスクを軽減できる

○いまある経験、スキルを活用してキャンプ事業をはじめよう

・・・小さな取組みや、草の根の活動こそ、いまでき得るキャンプ事業の在り方ではないでしょうか

【感想、まとめ】

自分自身の経験不足により、視聴していただいた方の満足度は低かったと思います。あらためて申し訳ありませんでした。キャンプにかかわる方や組織にとって有益な情報やお知らせを提供できるよう、今後さらに精進しますので、これに懲りずにご指導のほどよろしくお願ひします。

- =====
- 石垣島のフィールドから、コロナ禍でのプログラム紹介
 - 内藤 明（ないとう あきら）さん
 - 石垣島エコツアーりんぱな



【キーワード】

親子キャンプ、夜の活動、生物多様性、
スマホ（スマートホン）、本物に触れる

【ワークショップの内容】

今の時代だからこそ沢山のの人に自然とのつながりを感じてほしいですが、変化が激しく、またサービスが多様化する現代において実現の難しさを感じています。今回は沖縄 石垣島で実施しているエコツーリズムを通して、夜の楽しみ方や、人と生きものの共存、スマホの活用事例などの話題をご提供致します。

【団体リンク（URL）】 <https://rinpana.com>

W-3 ルーム 4
14:30-15:00

=====

《報告》

【ワークショップ講師を受けるに至った経緯】

私は沖縄の離島でエコツーリズムのガイドサービスを主催しています。以前、安全講習でお世話になったプラムネットの渡辺さんより「今年度は感染拡大予防のため、オンラインで開催することになったこと、そして、この中で自然体験の現場とオンライン会場とをつなげる「フィールド紹介」や「プログラム紹介」を取り入れたいこと」など、いくつかのご提案を頂きました。弊社では宿泊を伴った自然体験やキャンプ体験を行う機会はととても少なくお力になれるか不安はございましたが、折角拝命した機会ですので参加者の方々にお楽しみいただけるよう企画考案していこうと思えました。

【ワークショップを実施するにあたって行った準備】

個人的にはキャンプが大好きです。離島での宿泊の際、また野生生物の調査業務などではスタッフ 1~2 名で半ばビビーのようなスタイルで野山どこにでも泊まります。グランピングなどが流行する昨今、私のようなワイルダネスなキャンプを楽しむ（また楽しむ）人は何方かと言うと変わり者かと思居ますし、そうした情報をお伝えするのが良いのか、それとも弊社の業務においてコロナ禍において実践している事例をお伝えするのが良いのか大変悩みました。私は医療現場での経験もあり、当時仕えていた医師がコロナやアデノ等ウイルスの研究者であったため人畜共通感染のウィルスについて様々な情報を教え込まれていました。そのため弊社ではいち早く業務を停止し野生生物へのウイルス伝搬防止に努めました。

のでそうした話が良いのか、ですが禍の中において一見ネガティブともとれる情報ばかりをお伝えするのもどうかと思います。何かお役立てできる情報をお伝えしたいなと思いましたが、どういった方が聞かれるイベントなのかも解りかねましたし、私も他業務に追われる一方で開催直前まで数度のブレインストーミング程度しか行っておりませんでした。

てっきり年に1度のイベントかと思っておりましたので、事前打ち合わせにて開催が4回目であることを告げられ、それだけやっているのならかなりの情報交換がなされていて、実践的な具体例の提案を主に求められているのだろうと悟ることが出来ました。

【ワークショップの中のこだわったポイント】

事前の3会場でどのような話題提供がされたのか、またどのような情報を期待されているのかといったニーズも完全に把握していたわけではありませんでしたので、オリジナリティのある情報でかつ、キャンプ場経営などをされている方に対してのご提案ができれば良いなと考えておりました。ですが弊社も私個人も、キャンプ場やキャンプ団体と異なり野生生物を扱う業務に就いています。その中で、現在またはこれからキャンプやイベントなどの開催を検討されている方に対し、夜の楽しみ方のご提案ができればと考えガイドの実践例などをご紹介できればと、星や星座鑑賞、夜行性生物の観察などの事例紹介を行居ながら、弊社でコロナ対策として実践しているオンラインツアーの様子をお伝えできればと野外からの配信を検討しました。

【ワークショップを通して伝えたかったこと】

こうした状況下であるからこそ沢山の人をキャンプに誘ってほしい、というただその一言に尽きます。特に都会の子どもたちにおいて自然離れに拍車がかかることは避けたいと考えておりましたし、自身でオンラインツアーなど企画していますが、正直、オンライン化は失敗だなと思っています。画面越しに自然を見せることほど無力さを感じる事はありません。特に日頃現地でのガイドをしている身からすると強く思います。

【感想】

私も当日はタイムキープがうまくできず時間を余らせてしまいました。通常は2名で行っているものなので、ひとりで行うとなるとやはり難しさを感じました。今後につなげたいと思います。

【まとめ】

機会を頂きありがとうございました。私自身にも良き学びになりました。

- =====
- オンラインとキャンプをつなげる、農業体験の現場から
 - 石川 大晃 (いしかわ ひろあき) さん
 - いこーよ四季冒険部(アクトインディ株式会社)

【キーワード】

オンライン体験、農業・自然体験、いこーよ、四季冒険部



【ワークショップの内容】

私達は、緊急事態宣言が出た直後から、Zoom を利用したオンライン自然体験の可能性を探ってきました。本ワークショップでは、 コロナ禍におけるオンライン自然体験づくりをはじめた経緯や、試行錯誤のエピソード、現状、今後の展望をお話できればと思います。また、「OONOFARM(農家)」の大野さんに埼玉県狭山市の畑からご参加頂き、大野さんと実施している「オンライン農業体験」も少しお届け致します。

【団体リンク (URL)】 <https://iko-yo.net/topics/bouken>

W-5 ルーム 3
14:30-15:00

=====

《報告》

【ワークショップ講師を受けるに至った経緯】

本会の実行委員の 1 人である渡辺様からお声がけを頂いたのがきっかけです。緊急事態宣言下からオンライン自然体験を始める中で、様々なノウハウが蓄積されていきました。そのようなノウハウを社会に発信する機会が今までなかった事もあり、今回のお話を受けさせて頂きました。

【ワークショップを実施するにあたって行った準備】

今までの社内向けに作成していた事業概要等のスライドを社外の方でも分かるように整理したり、修正したりしました。また、当日農家さんに担当して欲しいポイントを整理し、事前に共有しました。他にも、畑にいる農家さんと事前に接続テストをしたりと、私も農家さんもしっかりとイメージを持ち当日を迎えられるようにしました。

【ワークショップの中のこだわったポイント】

オンライン自然体験は、したことがない人がほとんどのため体験内容の価値が伝わりづらい事から、実際に体験する機会をワークショップ内につくりたいと考えていました。体験ありきのワークショップであるため、導入の話を短くして、オンライン農業体験をすぐにして頂けるような流れをつくりました。また、オンライン自然体験の価値とは何かを自分の実体験も踏まえて、丁寧に伝えられるようにスライドを作り込みました。

【ワークショップを通して伝えたかったこと】

オンライン自然体験はコロナ渦でやむを得ずするものでなく、コロナは関係なくオンライン自然体験を実施できる可能性をお見せすることで、従来型の自然体験にこだわらない新しい時代の自然体験の形を考えていく必要性があることを伝えていきました。お話を頂いた際に、過去のミーティングの様子を拝見させて頂きました。主なテーマは、「今までしているキャンプをコロナ渦でどのように継続させていくか。」に終始している印象を受け、新型コロナ渦の影響でキャンプ事業が停滞し、当社以上に組織内の人的リソースが余るキャンプ団体も多い中で、何故新しい事に挑戦しないのかなあと疑問に感じていました。そのような経緯があり、結果をお伝えするのではなく、自分自身の思考プロセスやエピソードにも触れる事で少しでも多くの方が「自分の事業を振り返ったり」、「こんな事できるんじゃないか?」と未来志向でキャンプを考えるきっかけになれば嬉しいなと思いました。

【感想】

どのくらいの方に「伝えたかった事」が伝わったかは分かりませんが、ワークショップ終了時に「(オンラインであるにも関わらず)現場とのつながりを感じられました。」とのコメントを頂いたり、懇親会では、「オンライン自然体験ってコロナの間だけじゃないんだね。」というお話や「海外とつなぐと面白いんじゃないかな。」等色々な方が話しかけて下さいました。これらの事から、一定成果は得られたのではないかと思います。一方、懇親会で色々な方と対話する中で自分が考えている以外の可能性に触れる機会にも恵まれ貴重な機会になりました。今後とも引き続きオンライン自然体験に関する試行錯誤や色々な人との対話を通して、自分自身のオンライン自然体験への理解を深めていきたいと思いました。

【まとめ】

本ワークショップでは、新しいキャンプの形として、「オンライン自然体験」を扱いました。少しでも未来志向でキャンプを考える人を増やすきっかけづくりをするために、結果のみをお伝えするのではなく、自分自身の思考プロセスやエピソードを伝える事を心がけました。結果、参加者の中には、新しいキャンプの形に対して可能性を感じて頂いている方もいるようでした。

-
- 「オンライン OB 訪問」
 - 若手主催ワークショップ

【キーワード】

就職活動 OB 訪問 キャンプ業界 自然学校 野外教育団体



【ワークショップの内容】

大学・大学院で野外教育を学ぶことへの魅力は大いに感じながら、いざ卒業後の進路を考えると野外の世界へ飛び込むのには様々な不安が生じてしまうのが事実です。そこで、まずは実際に野外の世界で働いている方たちのお話を伺い、現状を知ることから始めようということで、「オンライン OB 訪問」の開催を企画しました。現時点では野外の道へ進むことを考えていない学生にとっても、キャンプ業界について知るきっかけになればと考えています。

【先輩紹介】



○豊留雄二 氏

大学院修了後、宮城県の自然学校を経て 2006 年に「自然遊びクラブ」を設立。「子どもから大人まで、もっとたくさんの方々が楽しく安全に自然の中で過ごせる」よう、様々な活動を展開している。



○鈴木浩之 氏

大学卒業後 OBS インストラクター、中央青少年交流の家職員、市議会議員を経験。現在は「人間力の育成」をコンセプトとして掲げる「有限会社エッセンシャルエデュケーションセンター」にて Sales & Promotion 担当マネージャーとして従事する。



○池田麻梨子 氏

アメリカ、フロストバレーYMCA で6年間の勤務経験があり、2019年秋から東京に帰任。『精神 spirit』、『知性 mind』、『身体 body』のバランスのとれた成長を重視するという理念のもと、キャンプ事業やチャリティー活動に携わる。

【団体リンク (URL)】

- 「自然遊びクラブ」 <https://shizenasobi.jp/>
- 「有限会社エッセンシャルエデュケーションセンター」 <https://e-ec.co.jp/>
- 「東京 YMCA」 <http://tokyo.ymca.or.jp/>

W-4 ルーム 3
13:00-14:15

新型コロナウイルス緊急事態宣言下における子どもの余暇の過ごし方について

○井上 恵里、寺田 達也（（公財）社会教育協会ひの社会教育センター）

研究目的

新型コロナウイルス（以下コロナ）感染拡大により外出自粛が余儀なくされ、学校が休校となり、子どもたちの習い事も中止が相次いだことで、自宅で過ごす時間が突然に、それも多くできた。

普段子どもたちの姿が見えない公園や河川敷にも姿をよく見るようになり、外遊びや川遊び、生き物探しなど、直接的な体験活動についてはむしろ促進されているように感じられた。

国立青少年教育振興機構³⁾ ⁴⁾が行った調査では、子どもの頃に体験活動を行っている青少年ほど他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身につけていることや自己肯定感も高い傾向にあることが示されている。また、子どもの頃の体験が豊富であった大人ほどやる気や生きがいを持っている人が多いとされ、自然体験活動を含む直接体験を通して子どもたちのよりよい育ちが増幅されていくことがわかっている。

しかし、現在の子供たちは学校に塾・習い事など毎日を忙しくする生活を強いられており¹⁾、子どもたちが「自由に過ごす時間」や直接体験を行う時間が減少していることがありそうだ。

本研究では休校期間前後の子どもたちをとりまく生活状況や問題点を分析し、「ゆとりの時間」を与えられたことにより、子どもたちの生活様式に変化が訪れ、長い間社会的課題になっていた「遊ぶ時間の増加」が「ゆとりの時間」によって実現できたのではないかを考察する。

研究の方法

休校期間前後の生活様式を尋ねる設問4件法²⁾ ⁵⁾で子どもたちの生活様式に変化があったのか、クロス集計や相関分析を用いて検討を行った。また、自由記述からコロナによって「得られたもの」「失ったもの」を調査。自由記述の集計・振り分けを行い、得られた回答をカテゴライズした。

対象は幼児～高校生の子どもがいる保護者（幼児 n = 87、小中学生 n = 354）で規模は全国調査とし、

回答にはGoogleフォームを用いてオンラインにて回答を依頼した。

結果

1. 強制的なゆとり時間の増加について

「休校で『得られたもの』『失ったもの』について教えてください。」という自由記述の設問からゆとりの時間が得られているか調査を行った。まず、「得られたもの」に関しては、回答項目の数を基準とした回答率で、69%が家族との関わり、8%が時間的ゆとりが得られたと回答している。子どもたちは学校が休校になり、保護者の勤務形態の設問からは、51%の人がテレワークなどが在宅勤務に切り替えており「家族との関わり」というゆとりを生み出したのではないかと考える。

また、得られたものの記述からは社会への参画のようなものはなく、どれも家庭の中での関わりや家においてできるものが上位にきていることが分かる。

一方で「失ったもの」については40%が友達との関わり、13%が学校生活と回答。外や普段なら社会に出ることによって得られるものを失ったと回答した。これまでは社会に向いていた活動が家の中で過ごす形態に変化し、従来の生活環境とは異なったことが見てとれる。

これら2つの自由記述の結果より、ゆとりの時間の増加が得られており、加えて、多くがそのゆとりの時間は家族で過ごしていることが分かった。

2. 外で遊ぶ時間の増加について

家の中などで過ごすことが多くなったゆとりの時間と、外で遊ぶ時間と関連性があるかどうかを検証した。質問項目ごとの相関分析の結果から以下のようなことが得られた。休校前に「外へ遊びに行かない」と回答した人の休校前に「自然へのふれあいに興味がない」と答えた人との項目に正の相関がみられた（ $r = .387, p < .001$ ）。しかし休校前に「外へ遊びに行かない」と回答した人の「休校中に自然へのふれあいに興味を示すようになった」との項目で

も負の相関がみられた ($r = -.225, p < .001$)。このことからコロナが感染拡大し、家族で過ごしたり、時間的なゆとりができたとしてもその興味が自然に向くという有意な結果は得られなかった。

この他にも生活形態とメディアとの関わり方を尋ねた項目では、遊びの中心はゲーム・メディアであることがわかった(表1)。

(表1) **. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)		休校中: 動画をたくさん見た	休校中: テレビをたくさんみた
休校前: 外で安心して遊ぶ場所が減っている	相関係数	.211**	.144**
	有意確率 (両側)	0.000	0.007
	度数	348	349
休校前: 夜寝るのが遅い	相関係数	.184**	.138**
	有意確率 (両側)	0.001	0.010
	度数	348	349

また表2からは生活リズムの変化がなかった。1、2ヶ月程度の時間的なゆとりでは自然への興味への変化には繋がらなかったように思われる。

(表2) **. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。		休校前: 夜寝るのが遅い	休校中: テレビをたくさんみた	休校中: 規則正しい生活が送れるようになった	休校中: 自然とのふれあいに興味を示すようになった
休校前: 宿題に追われている	相関係数	.219**	.138**	-.161**	0.024
	有意確率 (両側)	0.000	0.010	0.003	0.655
	度数	352	350	348	348

表3からは身体を動かすことと自然への興味には関わりが見受けられた。

(表3) **. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)		休校前: 運動する時間が短い	休校中: 身体を意識的に動かすようになった
休校前: 自然とのふれあいに興味がない	相関係数	.363**	
	有意確率 (両側)	0.000	
	度数	350	
休校中: 自然とのふれあいに興味を示すようになった	相関係数		.464**
	有意確率 (両側)		0.000
	度数		348

まとめ

結果より、コロナの影響による子どもたちの遊びの変化においては、自宅に居る時間が増えたことで近所の自然に目を向けるような機会になるかと仮定したが、結局はメディアでの遊びになったことが本研究で明らかになった。

ゆえに今回のような緊急事態宣言下で子どもたちの学校は休校になり、時間的なゆとりができたとしても、時間があるだけでは、子どもたちが自然へ興味を寄せることには繋がらないことが分かった。

今後の展望

本研究中、「自粛期間中に気軽に遊べる場所がありましたか?」という設問に61%の人が「いない」と回答し、「お子さんが一緒に遊ぶ相手はいましたか?」という設問には36%の人が「いない」と回答した。さらに普段から外遊びをせず、コロナ禍においてもしないと回答した人の中で自粛期間中に気軽に遊べる場所がないと回答した人は86%にもものぼった。「外で遊ぶ」ためには、時間だけではなく、「空間」「仲間」などほかの条件も無いと実現しないのではないかと考える。

おわりに

1、2ヶ月程度のゆとり時間では、子どもたちの直接的な動機だけで自然への興味をもつ、という段階まではいかなかった。やはり時間以外の要因を検討するべきであると考えたい。私たち野外指導者は外遊びの重要性をととてもよく理解しており、子どもたちを自然の世界へ誘う工夫をしているだろう。しかし子どもたちの外遊びをさらに促進するためには、外遊びの環境設定や仲間づくりなどが必要であり、そこから生まれるリスクを熟知しているようなことも必要なようだ。これらを踏まえると自然体験指導者の力が今後より求められるようになっていくのではないかと考える。

引用文献

- 1) Benesse 教育研究開発センター「第1回子ども生活実態基本調査報告書」26-28 (2005)
- 2) シチズンホールディングス「「子どもの時間感覚」35年の推移」3-8 (2016)
- 3) 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」69-76、2010
- 4) 国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」96-103
- 5) 村田光範「現在の子どもの生活実態とその対応について」(2001)

長期自然体験活動が小学生の学校における適応感に及ぼす影響

－ S 小学校セカンドスクールを事例として－

○小澤 孝亮（筑波大学 大学院）、渡邊 仁（筑波大学）

【背景と目的】

文部科学省(2019)によると、近年、学校における児童生徒の問題行動や不登校は増加傾向にあり、それは特に小学校において顕著である。問題行動とは、いじめや暴力行為、自殺などであるが、中央教育審議会の答申では、そのような子どもたちの問題行動等の背景や原因の一部として、「自然体験の減少」を挙げ、自然の中での体験活動の重要性を主張している。

自然体験活動による教育的効果は、これまでにいくつか挙げられており(文部科学省,2009 など)、その効果は長期のものほど高い。しかし、その効果について児童の問題行動等に直接関係すると思われる、主観的な「適応感」から検討を行っているものは見受けられない。

そこで本研究では、長期自然体験活動が児童の学校における適応感に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

【方法】

- (1) 対象:M 市立S 小学校セカンドスクールに参加した5 年生(計 63 名)
- (2) セカンドスクール実施期間:2019 年9 月 29 日から 10 月 6 日の計 8 日間
- (3) S 小学校セカンドスクール目的と日程
目的:①自分で考え進んで行動する。②現地の自然や人びとの生活などについて自ら課題をもち、主体的に追及する。③現地の人々と心の交流をし、自然の中で豊かな体験活動をする。④日本の国土や森林の様子を知り、森林のはたらきをもとに環境と人のかかわりについて考える。⑤学習したことを工夫してまとめ、伝える。

	午前	午後
1 日目	出発式	開校式、竹で箸づくり
2 日目	地域探索、そば打ち体験	稲刈り、農業施設の見学
3 日目	ハイキング	ハイキング
4 日目	課題別学習	資料館見学、民宿別活動
5 日目	林業体験	岩魚のつかみ取り
6 日目	地元小学校との交流会	わら細工体験
7 日目	合掌造り集落の見学	民宿別活動
8 日目	閉校式	解散式

表1 S 小学校セカンドスクール日程

(4) 調査内容

①アンケート調査:「小学生用学級適応感尺度(江村ら,2012)」を一部改変したものをを用いて、セカンドスクール直前と直後の登校日に調査を行った。本尺度は3 因子 15 項目(I 居心地の良さの感覚:5 項目、II 被信頼・受容感:4 項目、III 充実感:6 項目)から成り、4 件法で回答を求めた。

②参与観察:適応感の変化をもたらした要因について検討するため、指導員として参加した筆者が担当した児童を中心に、日々の活動や生活の様子について参与観察を行った。また、他のグループの児童について、後日他の指導員から聞き取り調査を行った。

(5) 統計処理:t 検定を実施し、有意水準は 5%を採用した。なお調査用紙の不備により、対応のない検定を行っている。

【結果と考察】

因子別の t 検定を行った結果、どの因子においても有意差は認められなかった。続いて質問項目別の t 検定も行ったが、どの項目においても有意差はみられなかった。

	pre		post		t値
	M	SD	M	SD	
I-居心地の良さの感覚	2.86	3.89	2.98	4.12	-0.72
II-被信頼・受容感	2.83	2.50	2.85	2.59	-0.19
III-充実感	2.97	3.88	3.00	4.01	-0.28

表2 t検定結果(因子)

学校における適応感に有意な変化がみられなかった原因の1つは、S小学校セカンドスクールの活動体制やグループの決め方にあると思われる。

山下ら(2010)は、学級の中で排他性が高いことは学級適応感に負の影響を及ぼし、固定的な集団への志向が高い児童は学級への適応感が低くなるとしている。S小学校セカンドスクールにおける活動は、ほとんどがグループごとで行われており、後述するグループの決め方に鑑みると、普段一緒に過ごしている仲間集団と同じになる可能性が高かった。このことは「普段の仲間たちの関係強化」といった結果をもたらし、児童の排他性を高め、固定的な集団への志向も高めてしまった可能性が考えられる。

つまり当セカンドスクールでは、活動グループや小さな集団における適応感には向上したかもしれないが、「学校における」適応感の向上にはつながらなかったと思われる。S小学校では、児童全員に「同じグループになりたい人」を複数書き出させ、その中で最低でも1人は同じグループに含まれるようにし、そこから児童の相性などを考慮して教員が調整を加える形でグループを決めていた。普段学校で過ごしている仲間と同じ面々になることが予想され、排他性や固定的な集団への志向を高めるのではないかと考える。

しかしながら、自身の参与観察や他の指導員への聞き取り調査から、児童の適応感の向上につながると思われる要素はいくつも得られた。例えば、他の指導員の証言により得られた男女間の交流などである。そのことが、わずかではあっても平均値を向上させたと思われる。

また、pre-post間で標準偏差もわずかに拡大している。聞き取り調査から、もめごとや児童同士の話し合いの有無、指導員の指導法や接し方など、児童はそれぞれのグループにおいて大きく異なった経験をしていることが示唆された。これは、適応感への影響が児童により異なっていた可能性を示し

ている。

【結論】

- (1) 長期自然体験活動に参加した児童の学校における適応感の変化に、有意差はみられなかった。
- (2) 長期自然体験活動における事前のグループ編成は、学校における適応感の変化に対し、重要な要素であることが示唆された。
- (3) 参与観察や聞き取り調査から、それぞれの児童によって、適応感への影響が異なっていることが示唆された。

今後は、活動体制やプログラム内容の影響について、多方面から検討することに加え、児童の視点からの適応感の変化を調べていく必要がある。

【参考資料】

- (1) 文部科学省(2019)：平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について、文部科学省初等中等教育局児童生徒課
- (2) 文部科学省(2009)：農山漁村での長期宿泊体験による教育効果の評価結果について
- (3) 岡本真彦(1999)－「3章：学校学習の心理と指導」、北尾倫彦、林多美、島田恭仁、岡本真彦、岩下美穂、築地典絵(著)、学校教育の心理学：明日から教壇に立つ人のために、北大路書房、49-86
- (4) 江村 早紀、大久保 智生 (2012)：小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討，発達心理学研究，23-3，241-251
- (5) 山下縁・有倉巳幸(2010)：児童の友人関係と学級適応感に関する研究、日本教育心理学会、日本教育心理学会総会発表論文集、52-391

民間野外教育団体の組織キャンプにおけるプロダクト構造の分析

○矢野 達也（大阪体育大学大学院）、伊原 久美子（大阪体育大学）

1. 緒言

マーケティングにおいて、事業戦略における優位性を確保するためには、マーケターが扱う商品としてのプロダクトの構造を理解して市場に提供されるプロダクトの品質向上に努めなければならないという¹⁾。野外教育の分野においては、子どもたちに行う組織キャンプもサービス製品であり、顧客に販売している商品の1つといえる。したがって、野外教育の分野においてもマーケティングなどの研究を行う必要がある。そこで、同じサービス製品を対象としているスポーツマネジメント分野で行われている研究など²⁾を参考に、子どもたちの社会教育の一環として各地で実施されている組織キャンプというサービス製品に焦点をあて、組織キャンプのプロダクト構造を明らかにすることにした。

組織キャンプのプロダクトを明らかにすることは組織キャンプというサービス製品についての理解を深めることでもあり、マーケティングを行うための基礎的な資料となる。したがって、プロダクトの構造を明らかにすることは、組織キャンププログラムを提供する団体・組織に対して示唆を与えることができると考えられる。

2. 研究方法

2-1. 調査方法

民間野外教育団体のキャンプに子どもを参加させたことのある保護者を対象とし、予備調査と本調査を行う。調査はGoogleフォームを使用したオンライン調査を行い、民間野外教育団体からメールでGoogleフォームのURLをメールで保護者へ送信をして回答を求めた。

2-2. 予備調査について

予備調査の調査内容はキャンプに関することについて自由記述で回答を求めた。調査の対象は、関西で組織キャンプを行っている2団体の保護者であった。調査の期間は11月の中旬から11月末であった。A団体からは30件、B団体からは15件の回答があった。

2-3. 本調査について

本調査の調査内容は予備調査の結果から項目作成をした組織キャンプのプロダクトに関する内容を

を調査する予定である。

調査対象は、民間野外教育団体の組織キャンプに子どもを参加させたことのある保護者である。期間は12月に調査を行う予定である。

3. 予備調査のアンケート結果と考察

テキストマイニングソフトの1つである。KH Coderを用いて自由記述のデータを単語で抽出した。

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自然	38	協調性	6
体験	20	子ども	6
自分	17	新しい	6
協力	15	生きる	6
楽しい	14	過ごす	5
経験	13	活動	5
感じる	10	子	5
親	10	子供	5
学ぶ	9	時間	5
日常	9	自然体験	5
遊ぶ	9	社会性	5
考える	8	場所	5
身	8	大変	5
人	8	不便	5
非日常	8	野外	5
友達	8	養う	5
離れる	8	違う	4
力	8	学校	4
外	7	環境	4
楽しむ	7	作る	4
思う	7	参加	4
生活	7	自信	4
仲間	7	寝る	4
普段	7	知る	4
		味わえる	4
		様々	4

図1. 出現回数上位50語句一覧

自然や体験、協力などの語句が多く多く抽出された。このことは、多くの保護者がキャンプに対して「自然」や「体験」、「協力」といったことを求めていると考えられる。「自分」という語句からは、「自分に自信をつけて欲しい」や「自分で考えて行動すること」など子どもに関する内容であった。

これらのデータを元に本調査の調査項目を作成し、組織キャンプのプロダクトを明らかにすることを目的に本研究を進めていく。

参考文献

- 1) 原田ら (2018) スポーツマーケティング改訂版、大修館書店、p36-70
- 2) 醍醐笑部ら (2016) : ダンス映像のプロダクト構造分析：スポーツ鑑賞授業のための基礎的研究、体育・スポーツ経営学研究、29、21 - 32

CAMP×ONLINEを実現！

【空想キャンプ場】の取り組みと今後の可能性について

○越前麻代 (SpringNeige) 中山結香 (SpringNeige) 高橋容子 (SpringNeige)

新型コロナウイルスにおける緊急事態宣言下にあった2020年5月、クローズを余儀なくされているキャンプ場と外出を我慢しているキャンパーをZOOM上で結びつけ、少しでも楽しく自粛を乗り越えてもらえないかという思いで【空想キャンプ場】という企画を実施した。

「キャンプアンドキャビンズ (栃木)」「昭和の森フォレストビレッジ (千葉)」「おぐに森林公園キャンプ場 (新潟)」など関東圏の5件のキャンプ場から中継を繋ぎ、施設案内やアトラクションの紹介、五右衛門風呂やヨガなどを実践してもらった。またキャンプブロガーのSAMさんからは「withコロナ時代のニューノーマル」としてキャンプ場での新しい過ごし方や、ずばらママさんからは「家族におすすめのキャンプ場」の紹介、そして私たちSpringNeigeは「親子キャンプクッキング」として画面の前の皆さんと一緒に“うどん作り”を楽しんだ。そして最後は「海上キャンプ場 (千葉)」からのキャンプファイヤーと「和島オートキャンプ場 (新潟)」の日本海に沈む夕日を、交互に画面を切替ながら、ギターリストに合わせて、参加者もミュートを解除し「パプリカの合唱」を行った。

ただの紹介VTRに終わらせないために、ZOOMならではの双方向性やリアルタイムでの時間共有に意識を向け、体験=コトを通じてみんなで一緒に楽しめるような時間を作り

上げた。申込みも250組ほどあったが、常時80人近く、最高140人くらいの視聴、さらにテレビやメディアでも多く取り上げられ、大成功だったね、という言葉も多くいただくことが出来た。

▼空想キャンプ場の様子▼



続いて【空想キャンプ場】の第二弾として夏休みに「キャンプにぴったりのゲームを0から考えて商品化し、キャンプ場で売っても

らう」という小学生のサマースクール企画を用意した。緊急事態宣言の余波を受け、今年の夏休みはとても短くなってしまい、お出かけもままならない日々だったが、小学生とZOOMで全8回の企画会議を重ねて、「キャンプにぴったりのゲーム」を作り上げた。大東文化大学の中村教授とその元で学ぶ学生さんたちにサポーターとして協力していただけたこともとても大きく、ZOOMを使って“0から何かを作り上げる”という、とても有意義な時間を過ごすことが出来た。



企画会議と並行して、空想キャンプ場初回に出演してくれたキャンプ場さんにゲーム販売の協力を取り付け、商品化の資金はクラウドファンディングで集めることにした。10月から1ヶ月半行ったクラウドファンディングで支援者96名、目標額の137%、50万円以上の資金を集めることに成功し、2020年11月現在はカードゲームの制作出稿をしているところである。



ストーリーを応援していただき、支援金という形で目に見えるクラウドファンディングで、このような結果を出せたことは、【空想キャンプ場】の企画が多くの人々の心に響いたからこそだと思っており、とてもありがたい、嬉しく思っている。

第一弾・第二弾ともに、一見アウトドアとは対極に感じられるZOOMというオンラインツールを用いて、人と体験を結びつけたのが本企画である。

実施してみて感じたのは、キャンパーとキャンプ場を、とても近い距離で結びつけることができるため「ファン作りの場にぴったり」だということ。子どもたちと指導者（サポーター）を落ち着いた時間で結びつけることができるため「学びの場」としてぴったりだということ。ただしそこには、単にオンライン上で結びつけるだけではなく、そこで得られる「体験＝コト」がどういった物なのかがとても重要であり、面白く価値のある体験を提供できたこの【空想キャンプ場】は、全国のキャンプ場とキャンパーが「仲良くなれる」場所として、そして「子どもたちが学び、力を発揮する場」として、とても面白い可能性を秘めたツールとなりえるのではないかと強く感じている。

コロナに振り回された2020年だったが、その環境がなかったら決して作ることができなかった現れなかったこの【空想キャンプ場】。“コト”を通して人と場所を結びつけ、「家族力を育もう」というテーマで活動している私たちが、これから大切に育てていきたい新しい場所となった気がする。

コロナでも四季冒険

○近藤みのり・稲垣樹（四季冒険部インターン）

私たち四季冒険部は狭山市、飯能市、町田市、厚木市を拠点として、親子向けの自然体験イベントを行っている。2020年夏には、狭山市でのカブトムシ採り体験、飯能市での清流探検というイベントを行った。私たちの活動は、普段自然に触れる機会がなく、外でできることが限られている子どもたちが、自ら自然の中で行動して成長する手助けをするという目的をもって行っている。

2020年、新型コロナウイルスの感染拡大によって、私たちのイベントも実施が難しいと判断されていた。しかし、その中でも子どもたちの可能性を広げる場を絶やすことのないように夏のイベントは市内の家族限定で募集し、イベントの規模を縮小して実施した。また、今年はオンラインで行うイベントも導入し、更なる自然体験の可能性を広げていった。今回は、夏の野外イベントにおけるコロナ対策を紹介する。

コロナ過のイベント実施のために私たちはいくつかのコロナ対策を実施した。まずイベント会場に到着した参加者の検温である。会場に来た時点で体温を計測し、標準地であるかを確認した。次に、車で来場された方に開始5分前まで車内での待機をお願いした。この時にイベント参加までの準備をお願いし、なるべく参加者同士やスタッフがイベント前に接触しすぎないように取り組んだ。この準備時間の中で同時に、アンケート調査も行った。アンケートはGoogleフォームを用いた簡単なもので、イベント開始前の体調などの確認とイベントが終わった後の感想や振り返りを書いてもらうものを用意した。感想の中には初

めて昆虫採集をして大喜びをしていたお子さんの様子や、来年も参加したいといった声もあった。次の対策は、イベント会場とトイレにアルコールを設置するというものである。トイレに入る前後や、イベント開始と終了の際にアルコール消毒をしてもらい感染対策を行った。最後に、イベントスタッフのフェイスマスクやマウスガードの着用である。これは、多くの企業で行われている対策だが、夏に行うイベントでの使用目的別の考察を紹介する。

まず、今回使ったものはフェイスマスク2種類とマウスガード1種類である。フェイスマスクは額に装着するタイプのもの、メガネをかけるように装着するタイプのものを使用した。額装着式のフェイスマスクやメガネ式のフェイス



図1 額装着式フェイスマスク
(清流探検下見時、着用)

マスクはどちらも簡単に取り付けることができ、顔全面を覆うので内外からの飛沫による感染を防止できる設計になっている。この2種類の欠点は、清流探検イベントのように川に入った

りする体験では、顔を覆っているシールドの部分が水で濡れてしまったり、湿度が高くなる梅雨の時期や人が発する蒸気などによる曇りによって視界不良が起こってしまうことである。また、子どものように自分より目線の低い位置に人がいる場合など、下方への飛沫は防ぐことができないという点がある。次に、マウスガードはフェイスマスクと違って口元のみを覆う設計のため、水滴や曇りによる視界不良が起らず、子どもと接する際も下方への飛沫を防げるようになっている。こちらの欠点は、少々シー



図2 マウスガード（清流探検当日、着用）

ルド部分が外れやすくなっており、つけ外しの際や持ち運びの途中でシールド部分が外れて、治すのに手間取ってしまうことがある。これらの点から、私たちは活動において使用する感染対策装備として、屋内での活動はフェイスマスク、野外での活動はマウスガードを推奨する。また、マウスガードを使用する際はシールド部分が外れてしまわないように丁寧に扱う必要がある。

今年、新型コロナウイルスによって小規模のイベントを運営してきたが、その中でも予想以上に参加者が多かったことが印象に残っている。コロナ過という通常より対策をして慎重に行動するべき時であっても、子どもが成長する場を設けるということは非常に大切

であり、現代の教育にも求められるものであるということが今回のイベントによって分かった。今後も、感染対策を実施し安全なイベント運営を行う上で、子どもたちが自然に興味をもって自ら進んで行動するような場を作り、子供の成長を手助けしていきたいと考えている。

ろう・難聴児のためのオンラインキャンププログラムの試み： デフ・アドベンチャー・キャンプ・オンライン 2020

○針ヶ谷 雅子（ろう・難聴児の体験活動を支える会）

1. はじめに

2020年8月に8泊9日で計画していたキャンプが、COVID-19感染拡大の影響で実施できなくなった。このキャンプは、ろうや難聴の子どもが参加できる自然体験や生活体験の貴重な機会となるよう準備されていた。ろう・難聴の子どもたちが「通じる」環境で活動できるよう配慮され、かつ野外教育として専門家が提供する長期キャンプはほとんどない。そのような機会が失われること、また、スタッフとして集まったろう者や高校生・大学生の交流や学びの場も失われることを懸念し、コロナ渦でも実施可能なオンラインでのプログラムを企画した。

	プログラム	内容
1 日 目	15:00 自己紹介	
	15:30 ロープワーク	3種類の結び方を練習
	17:00 夕食	各家庭で
	19:00 星の話 各自星空観察 就寝	夏の大三角形・ペルセウス座流星群 各家庭で
2 日 目	8:00 朝食作りと会食 片付け	各家庭でオープンサンドを作り、会食 石けん洗剤の使い方
	9:00 ウッドクラフト	木片のキーホルダー作り
	10:30 解散	

2. 準備

キャンプに参加を申し込んでいた10名のうちの6名と、その兄弟姉妹が3名の合計9名が参加した。2日間（各日半日）で、ロープワーク、星座や流星群の観察、朝食作り、ウッドクラフトの4つを実施した。前もって参加者とスタッフに、当日必要なもの（資料、ロープ、クラフトキットなど）を郵送しておき、当日はZoomで各プログラムを実施した。

3. 工夫したこと

事前に確認すると、参加する子どもたちはオンラインでの交流には慣れているとのことだったが、手話をメインに、見てわかるコミュニケーション方法を工夫した。説明のスライドを画面共有している横に説明者のビデオを表示してもらい、スライドと手話を両方見られるようにし、ゆっくりと進めるようにした。また、子ども1名につきスタッフ2名を担当

者として決め、3人が互いの画面だけを見て活動する時間も用意した。ロープワークなどは、習得の進度が違うので、この方法で全員が無理なく集中して実施できたようだった。



聴スタッフの中には、手話を習得していない者もいたが、ろうのスタッフがチャット機能で子どもたちの手話を日本語に翻訳してくれたため、みんなが通じるコミュニケーションを楽しめた。

4. 良かったこと・これからのこと

子どもたちが活動を楽しみ、学修できたこと、スタッフ＝キャンプに関わる大人がたくさんいることを知り、実際のキャンプへの期待が高まったことなどを、参加者の感想からうかがうことができた。また、実際にろう・難聴の子どもたちとのキャンプを体験したことがない学生スタッフにとっては、比較的負担の少ない方法で経験を始められたことも良かったのではないだろうか。これからも彼らと力を合わせて良いキャンプを提供し続けていきたいと、思いを新たにしたい。



バーチャルキャンプをやってみよう

○柳下 史織、谷川 真理（公益財団法人東京YWCA）

1. はじめに

密集・密接を求めるのがキャンプ。2020年度の新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、東京YWCAでは、夏場の野尻キャンプ場を閉鎖した。キャンプを実施しなかった理由と今後へのつながりのために実施したバーチャルキャンプをふりかえる。

2. キャンプ場の歴史

カナダ出身のエマ・カフマンが、野外教育による若い女性の心身育成とリーダーシップ養成の必要性を説き、組織キャンプを実施できるキャンプ場を寄付することで開設した。

1931年 第1回野尻キャンプ（地元国際村にて）

1932年 野尻キャンプ場開設

1941年～1947年 文部省指令により活動中止

1961年 松代群発地震により一部中止

2020年 初めて自主的に全てを中止

3. キャンプを中止にした理由

バスで移動する子ども対象のキャンプは無理でも、現地集合のファミリーキャンプだけでも実施できないか検討もしたが、次の項目のために実施は難しいと判断した。

- ・リーダー、キッチンスタッフ、医療スタッフが関東圏から移動。ほとんどが医療関係、学校、老人ホーム、介護施設、養護施設に勤務している。
- ・調理場が狭い、食堂はテーブルとイスの出し入れ
- ・リーダー用居室に十分なスペースが確保できない

4. オンラインへの歩み

(1) SNS 発信

Web と Facebook の他に、新しく Instagram を始めた。キャンパーやリーダーが野尻に行けない分、「野尻のいま」を伝える写真を掲載した。山菜、草花や動物、キャンプサイトのドローン映像などを配信した。

(2) Zoom でのオンライン

同じ青少年育成事業部で担当している外国ルーツ青少年のための日本語・学習支援では、5月からオンライン支援を開始。通常は吉祥寺にある武蔵野センターで、子ども個々に必要な支援を1対1で実施している。オンラインでは、最初に子ども

もと支援者20名位が集まり挨拶やクイズをした後、子ども1人と支援者2名をグループ分けする。支援者1人が教え、もう1人が教材共有をしてコメント入力をして一緒に学習している。

最初はキャンプと対極にあるバーチャル空間への抵抗もあったが、次第に子どもたちとオンラインでつながることを考え始めた。キャンプリーダーがオンラインで集まり、色々なゲームやキャンプソングを試してみると、ホワイトボード、ミュートやチャット機能を活用して意外と面白いことができた。試行錯誤を経て、子どもたちも交えてのバーチャルキャンプを開始した。

5. バーチャルキャンプをやってみて

キャンパーたちは仲間やリーダーと徐々に顔を合わせて喜び、話をして安心することができた。ビンゴ、言葉当て、ジェスチャー、借り物競争、借り物しりとり、絵しりとり、キャンプソングなど、いつも通りにはいかないが、楽しい時間を過ごすことができた。キャンプサイト散策の動画では、一緒に見ている保護者に子どもたちが説明している様子が画面越しで伺え、保護者にもキャンプ場の様子やリーダーとのやりとりを見てもらえたのも良かった。来年はキャンプ場で再会することを目標にしているが、それまでのつながりを維持するための方法の一つとし今後も継続していく予定である。

【オンラインメインホール（リーダー会）】

6月17日（水）・6月27日（土）・9月26日（土）

【バーチャルキャンプ】

7月11日（土）・8月26日（土）・10月17日（土）





オンラインメインホール (リーダー会)

資料 ◆「キャンプ研究」収録題目一覧

■第1巻(1997/12/20)

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察 ●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務

[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告 ●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告 ●不登校の子どもの暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

■第2巻(1998/7/20)

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創

[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する

[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

■第3巻第1号(1999/6/30)

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育「水辺活動」実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼吸ゲームの実践

■第3巻第2号(1999/12/25)

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム

●思春期女子キャンパーの理解と援助

[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分にはばさ影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学びの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

■第4巻第1号(2000/7/26)

[実践報告] ●'99無人島キャンプ in 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターぼちぼちハウス リフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●フィットネスキャンプを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

■第4巻第2号(2001/2/28)

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプ in 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル 2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプ in いけだ

[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

■第5巻第1号(2001/6/30)

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象にした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代やさしさ発見!びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプ in 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾新しいコンセプトを持ったシルバークャンプのこころみ

[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

■第5巻第2号(2002/1/31)

[実践報告] ●アドベンチャー in 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンパク大学の幼児キャンプ ●“共育”活動としての幼児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉 YMCA LD 児等キャンプ～つばさグループキャンプ～

[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

■第6巻第1号(2002/11/11)

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ～馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討～ ●人と人 つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプ in 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通しての人とのかかわり 第1回 ハッピーリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプ in 鷲敷キャンプ場 川内学童クラブ 鷲敷キャンプ場での試み

■第6巻第2号(2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発一港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み ●カッパ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ

[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

■第7巻第1号(2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用 ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から ●親子いきいきリフレッシュキャンプ事業中止から学ぶこと

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号(2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発一湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み ●子どもと共に創るキャンプ(I)一白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践から

●子どもと共に創るキャンプ(II)一白川小学校・三重大学による合同キャンプ in 石水溪の実践から

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間一わんぱくこども宿(10泊11日)に着目して ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究一国立室戸少年自然の家主催事業「日本版 School Water Wise」に着目して ●キャンプ実習における状態不安に関する研究一係の役割に着目して

■第8巻第1号(2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプ in ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラム一 Wilderness Education Association を事例として

■第8巻第2号(2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手の off the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号(2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(III)一白川小学校・三重大学合同キャンプの実践から ●閉鎖症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

■第9巻第2号(2006/1/30)

[実践報告] ●岡山YMCA ファミリーキャンプの実践報告～信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざして～ ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号(2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006 一第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義一小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプ一野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後にはばさ影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入したASEが参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふぉーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプ in むると実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分にはばさ影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告 [ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告一4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号(2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告一チャレンジ2702 ☆

事業の試みからー ●ユニバーサルキャンプ 2005 in むろと
[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び
●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第10 巻第3号(2007/3/30)
[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初の WEA 野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第11 巻第1号(2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007 ー第11 回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●2007 年は日本の組織キャンプ 100 周年か? ●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ●最近 5 年間における野外教育研究の傾向 ●2007 ACA National Conference 参加報告 ●日本キャンプ協会国際交流委員会の働き-AOCF 創立- ●"WILDERNESS FIRST RESPONDER"野外救急法資格取得コース ●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ●看護専門学校での授業として行うキャンプにおける学生の学び ●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ●ユニバーサルキャンプ 2006 実施報告
[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ●組織キャンプの魅力に関する研究～花山キャンプを事例として～ ●中学校における教科と自然体験活動の関連について ●キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ●キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的变化と自己評価 ●サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ～10 年の軌跡～

■第11 巻第2号(2007/9/30)
[実践報告] ●あさお冒険クラブの仲間づくりとエコ・キャンプをめざしてー野外活動を通して気づくことー
[研究資料] ●キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ●障害者キャンプにおけるバリアの研究ー身体障害者模擬患者を通してー ●キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第11 巻第3号(2008/1/30)
[特集] ●不揃いの麦から作るビールの味には深みがある
[実践報告] ●キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援についてー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー
[研究資料] ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響
[報告] ●第11 回日本キャンプ会議全体会報告～みんなで作るあしたのキャンプ(キャンプ場編)～

■第12 巻第1号(2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008 ー第12 回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ●民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメントに関する将来予測研究 ●キャンプ参加費に関する保護者の意識 ●米国サマーキャンプの日課活動(実修)についてーメイン州、キャンプ・オーアトカの場合ー ●知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ●ガンバ! 能登震災支援キャンプ報告 ●冬の陣と雪の吟ー「雪のそごい! を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ 2008」 ●ぼるぼるキッズ 2007 実践報告 ●日本の野外活動に対する中国の(小学ー大学)男女学生の認知度 ●「社会力」を育成する教育プログラムの開発ープロジェクトアドベンチャーの手法を応用してー ●連想法を用いたキャンプの効果測定の試み ●新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ●ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告ー他団体との連携と運営のポイントに着目してー ●「若者自立支援事業」[本当にやりたい! ことプロジェクト]実践報告 ●「サントリー・神戸 YMCA 共同プロジェクトー余島プロジェクトー」●「読書」による観想的キャンプ生活ー中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に着目してー
[ポスター発表] ●利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ●地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ●自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けてーキャンプが青少年の成長に及ぼす効果ー ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けてープログラムと自然・生活環境に着目してー ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けてー参加者と指導者に着目してー

■第12 巻第2号(2008/9/30)
[実践報告] ●幼児キャンプの実践 ●キャンプを通じた地域づくりの

試み「あしがらシニアキャンプ」

■第12 巻第3号(2009/1/31)
[実践報告] ●子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識ー不満足評価の視点に着目してー
[報告] ●キャンプディレクター2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ●第12 回日本キャンプ会議全体会報告～みんなで作るあしたのキャンプ(指導者編)～

■第13 巻第1号(2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 ー第13 回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割ー米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラムー ●病氣とたまたかう子どもたちに夢のキャンプをー医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぶちキッズキャンプの取り組みー ●休止スキー場を活用したキャンプの試みー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー ●指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ●組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ●ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ●中国における野外専門運動基地の現状ー天津市山野運動基地ー ●実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ●教員・保育者を指導する女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ●活動の質を高めるチャレンジドリフタックスの落差の追求ー日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法ー ●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える(1) ●体験がもたらす教育的効果 ●幼児とその保護者における自然体験の現状ー子どもの育つ環境による自然体験の違いー
[ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試みースケートキャンプの実践報告ー ●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査ー1 年目結果報告ー ●Means-End Analysis を用いたキャンプ効果の要因の検討 ●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8 年間の経緯と継続上の課題 ●小学校長期自然体験活動の効果とその要因ー鹿沼市自然体験交流センターを事例としてー ●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

■第13 巻第2号(2009/11/30)
[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～2009 年全米キャンプ会議に参加して～
[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察
[報告] ●第13 回日本キャンプ会議全体会報告～みんなで作るあしたのキャンプ(安全管理編)～

■第14 巻第1号(2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010 ー第14 回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ●ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ●G.N.C.A. スプリングキャンプ「ドリームキャンプ」報告 ●JALT プログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響 ●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違いーつながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察ー ●発達段階に応じたキャンプ効果の比較ーメタ分析を用いてー ●キャンプにおける場の力ーウィルダネス体験に着目してー ●日米交流サマーキャンプ 20 年の歩みーその 1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership 参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試みーツリーハウスづくりの取り組みからーなぜバックカントリースキーを求めたのかーバックカントリースキーへの移行に注目してー ●地域活性化に貢献するキャンププログラムに関する研究ーコンジョイント分析の適用ー ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について
[ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討ー「アイガモを食べる」体験プログラムの効果測定ー ●日米交流サマーキャンプ 20 年の歩みーその 2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果ー2 ヶ年調査結果の分析ー ●ウェビング・テープを使ったチームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ 2009 効果測定調査報告 ●体験型プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会 100 年の歴史

■第14 巻第2号(2011/1/30)
[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハット」調査ーその後にかける対応策とはー ●公園での野外教育実践ープレーパーク活動を通してー ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開
[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究ー山梨県の市営キャンプ場を例としてー
[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する

研究 ●専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

■第15巻(2012/1/31)

[特集] ●子ども達の悲しみを支えるということーグリーンキャンプの試みにむけてー ●東日本大震災の被災者を対象とするグリーンキャンプの取り組み

[実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題 ●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状 ●Hole in the Wall Camps ～病児キャンプの世界的ネットワーク～

■第16巻(2013/3/10)

[実践報告] ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題ー第2報ー

[研究論文] ●キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性

■第17巻(2014/3/10)

[実践報告] ●南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性 ●父子キャンプ(パパチャルキャンプ)の実践 ●「災害に備える」野外力をきたえよう アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

[研究論文] ●雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究

■第18巻(2015/2/15)

[実践報告] ●Frost Valley YMCAの教育価値 ●自然体験がキャンプ指導者の野外指導スキルに及ぼす影響

[研究論文] ●大切な人を亡くした子どものグリーンキャンプの実態とその効果に関する文献レビュー ●キャンプ体験が被災地児童のメンタルヘルスと生きる力に及ぼす影響 ●ハンディ気象計による気象リスクマネジメントの可能性～トムラウシ山遭難事故(2009)報告書より～ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析

■第19巻(2016/2/15)

[実践報告] ●民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析 ●高校体育科キャンプ実習報告-スポーツ選手の基礎力を育むことを目指して- ●長期キャンプの意義を改めて考える-「チャレンジキャンプ 2015～リヤカーで小豆島一周110kmの旅～」の事例から- ●くしろアウトドアキッズスクール 2015 冒険の旅の実践 ●キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム

[研究論文] ●不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討-社会施設と適応指導教室の連携事例 ●テーマパークでの修行体験を利用した体験教育の試み～Kidzania 就業体験

と野外教育の場合～ ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究

■第20巻(2017/2/15)

[実践報告] ●野外教育法を取り巻く最新の動向 ●ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果と考察

[講演録] ●第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会基調講演-Organized Camping in Japan-

[特別寄稿] ●組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したもの

■第21巻(2018/2/15)

[研究論文] ●キャンプ実習における大学生の資質能力の変容ーふきだし法による自由記述の分析を通してー ●大学運動部に対するASE プログラムが集団凝集性に及ぼす影響-新入生と在学生の比較から-

[報告] ●第21回日本キャンプミーティング講演会 自然と手を入れた自然(園芸)の中で～人を育てる野菜作り～

[特別寄稿] ●野外救急法を取り巻く最新の動向

■第22巻(2019/2/15)

[研究論文] ●危険な動植物の識別に関する研究 ●大学生を対象とした短期野外教育プログラムの教育効果に関する研究-大学生不登校問題に着目して-

[実践報告] ●組織キャンプのプログラムと教育効果-南会津チャレンジャーキャンプの実践を事例として- ●中華人民共和国の小学生を対象とした自然科学学習プログラムデザインの検討 ●北海道キャンプ協会が取り組む次世代へのバトンリレー-次世代野外教育指導者団体「えぞっぶ」- ●野外教育分野を学ぶ学生ネットワークが果たす新たな「学びの場」としての機能-「大学間交流スキーキャンプ」の活動報告- ●子どもの野外体験活動を推進する「鬼ごっこ遊び」の実践とその成果 ●青少年教育施設で発生した冬季の傷病に関する調査報告 ●Leave No Traceを意識した、キャンプにおける食器洗いの実践

■第23巻(2020/1/15)

[研究論文] ●日本における組織キャンプの一つの萌芽-学習院の遊泳実習について-

[実践報告]

●留学生・外国人を対象とした野外教育・宿泊研修の注意点-東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科の事例を基に- ●デイキャンプ実習に参加したC大学保育・幼児教育専攻学生の生きる力の変容-先行研究(2泊3日)との比較による成果と課題の分析- ●高校サッカー部新入生を対象とした組織キャンプの実践-チームビルディングを目的としたAction Socialization Experienceの導入- ●野外で『うまい飯を炊く』調理法の検討-飯盒炊飯を負の歴史から考える- ●地域研究: 里山キャンプを考える

◆日本キャンプミーティング(日本キャンプ会議/CAMP MEETING IN JAPAN) 発表題目一覧

■第1回日本キャンプ会議(1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[研究の部] ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ベグの打ち込み角と強度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について

[報告の部] ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的変化 ●冬のサバイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよいあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために ●「O-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●(神戸-東京)中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第2回日本キャンプ会議(1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[基調講演] ●全日本学生キャンプの草創

[研究の部] ●野外炊さんの薪(マキ)の代替燃料に関する研究 ●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察 ●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●グループを理解する～喘息児キャンプにおけるA子を通じて ●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響 ●喘息児キャンプにおける腹

式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について(2)

[報告の部] ●ACA アメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS 冒険を通しての体験学習 ●こども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後(1) ●フロンティアアドベンチャー事業のその後(2) ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第3回日本キャンプ会議(1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●台湾における童軍(ボーイスカウト)教育に関する研究 ●ACA 公認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開 ●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の葉の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●進学塾における野外教育への取り組み ●1ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育けやの森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプとNPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について考える(II)～5泊6日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアボトシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第4回日本キャンプ会議(2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター)

※第4回日本キャンプ会議は第5回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第5回日本キャンプ会議(2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげる～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み ●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●障害児キャンプの企画と運営-YMCA プロジェクト・SEED のケース ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第6回日本キャンプ会議(2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組み-ハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプでする大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告-アウトドアパスツの授業において ●丹波自然塾のあゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さについて ●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告 ●知的障害児のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローバー隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第7回日本キャンプ会議(2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイトにおける車椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English Immersion Camp における子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ 2003 ●長期キャンプ「わんぱく子ども宿(10泊11日)」の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み ●キャンプと音楽療法 2 ●親子参加型自然学校に関する調査 ●多摩川を題材とした環境教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける女子高校生の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第8回日本キャンプ会議(2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぱくキャンプ ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●学校へのキャンプの誘い ●大学生を集めるCAMP ●組織キャンプと社会福祉 ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践 ●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第27回ウィンタースクール実践報告 ●キャンプインフォメーションセンター相談記録より

■Camp Meeting in Japan 2005 - 第9回日本キャンプ会議(2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●第12回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004 夏の体験学習 夏! 君の勇気にか・ん・ば・い ●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナー-in ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告 ●国際自然大高校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグラー完成(映像発表) ●雪上キャンプでの動物の断熱効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●自然学校が与えた影響について ●山村留学における相談員の業務 ●野外トイレの研究 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究 ●災害と野外活動(私の体験) ●OBSプログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャ

ンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟(ACF)の創立

■第15回 Camp Meeting in Japan 2011(2011/9/22～25、静岡県立朝霧野外活動センター)

※第15回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立45周年記念第20回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■Camp Meeting in Japan 2012 - 第16回日本キャンプ会議(2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[特別講演] ●「グリーフ(ワーク)×キャンプ」にできること [口頭発表] ●防災教育に必要なとされるキャンプ技術～石巻での21日間の支援から～ ●「～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告 ●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」～アカデミーキャンプの実践報告～ ●YMCA フレンドシップキャンプ 子どもらしく過ごせる時間を取り戻す ●県外避難者の子どものケアとキャンプ ●三鷹子どもの楽校 福島の子どもたちと森の楽校サマーキャンプ～「つくる」を遊ぶ夏季学校～ ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査-その1 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション ●レスキューザックの開発と効果 ●キャンプ指導者養成におけるスキル習得に関する考察 ●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容 ●年間利用者8,000人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望 ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その1 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響-その1 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題(第2報) [ポスター発表] ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果(3)-4 ヶ年調査結果の分析- ●東日本震災被災地でのグリーフキャンプの実施報告「岩手しぜんとあそびキャンプ in テンパーク」の取り組み ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その2 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響-その2 ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査-その2

■Camp Meeting in Japan 2013 - 第17回日本キャンプ会議(2013/5/25、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●社員教育研修としての野外活動プログラムの可能性- Outdoor Training Program を導入したTS Camp - ●参加目的に着目した組織キャンプ参加者の特徴-白山市アドベンチャーキャンプの実践から- ●多文化での野外教育プログラムから考えたこと ●冒険的自然体験キャンプ「私たちの4日間」 ●幼稚園・保育園との連携～あかぎの森のようちえん実践報告～ ●岡山県の中山間地域における自然体験活動の実践報告 ●グリープケアキャンプに参加して～被災地の子どもたちとともに～ ●被災地地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●静岡県における不登校キャンプの取り組みについて ●国立青少年教育施設の取り組み-新しい公共型運営について-国立赤城青少年交流の家の取り組みから- ●自然体験活動におけるマダニ対策について考える～広島県での取り組み(報告)～ [ワークショップ発表] ●ウィルダネス教育協会指導者資格認定コースの報告と今後の展望 ●キャンプで使える「手話」表現

■Camp Meeting in Japan 2014 - 第18回日本キャンプ会議(2014/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●LEAVE NO TRACE の日本での必要性と普及について ●環境ボランティアリーダー海外研修(ドイツ)報告 ●組織キャンプにおける Leave No Trace プログラムが参加者の環境に対する態度に及ぼす効果 ●東京 YWCA 森林ワークキャンプ～プロに学ぶ森づくり体験～ ●ウィルダネス教育におけるウィルダネスの場についての検討～わが国での実践にあたって～ ●国際ワークキャンプ参加報告と参加動機に関する調査 ●キャンプカウンセラーのユーモア表出が参加者の集団雰囲気にも及ぼす効果 ●大学野外実習が体力・メンタルに及ぼす効果に関する研究 ●キャンプの力はこんなところにも!～ストレス耐性を高める効果～ ●ICUジュニアキャンパス・キャンプ～大学施設を使った大学らしい子どもキャンプの実践～ ●関東甲信越地区青少年施設協議会青年部会の取り組み～アメージングガイドができるまで～ ●災害時対策教育プログラムの実践について [ワークショップ発表] ●『ハンディ気象観測ツール』によるアウトドアリスクマネジント ●アメリカ組織キャンプからの学び ●続・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ●One Minute Camp Evaluation Experiential Education Evaluation Form 改訂版の体験 [特別講演] ●海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■Camp Meeting in Japan 2015 - 第19回日本キャンプ会議(2015/5/30、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●わが国におけるアウトワード・バウンドを基礎とした冒険

教育の動向についての一考察 ～文献による調査を通して～

● Day Camp の可能性～1日の中で子どもたちに主体をあずける～
● 米国キャンプ・オーアトカ(Camp O-AT-KA)における日課プログラムの意義～余暇教育としてのキャンプ・プログラム～ ● 北海道教育大学岩見沢校における指導者養成 ● キャンプが児童のアサーション行動に及ぼす影響 ● 登山におけるストレスコーピングに関する研究 ● スポーツチームに対する ASE プログラム導入が集団凝集性に及ぼす影響～チーム所属年数に着目して～ ● WEA 野外指導者養成コースにおける野外指導スキルの発達 ● 災害ボランティアとキャンプ ● 民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析 ● スキーキャンプのヒヤリハット ● キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響 ● 大学の授業としての、場に注目したカナダ厳寒期の多国籍遠征 ● あかぎワールドコミュニティ～余暇教育としてのキャンププログラム～ ● 自然体験で地域づくり まえばし・マイはし・プロジェクト ● 「海ガキ・山ガキになろう！2014 夏」実践報告
[ポスター発表] ● 公園における親子を対象とした自然体験活動プログラムの可能性 ● キャンプ体験が参加児童の道徳性に及ぼす影響 ● 静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況の推移とアンケートから施設の可能性と課題を探る ● Café de CAMP の作り方～参加者をつくる空間～
[あれこれ発表] ● 続々・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ● 工作体験(お箸づくり)を通じての安全で正しいナイフの使い方～ビクトリノックス工作イベントサポートプログラム～
● ハンディ気象観測ツールによるアウトドアリスクマネジメント(実践編)
[全体会] 子どもシンポジウム ● ろう(聾)の子どものためのキャンプ～デフキッズキャンプ～ ● 被災地域の子どものためのキャンプ～南会津アドベンチャーキャンプ～
■ Camp Meeting in Japan 2016 ー第20回日本キャンプミーティング(2016/6/4、国立オリンピック記念青少年総合センター)
[ポスター発表](研究発表) ● 国立青少年教育施設における冒険教育プログラムの取組～ジュニアチャレンジ淡路島一周～ ● キャンプ体験が小中学生のアサーティブに及ぼす影響 ● 大学キャンプ実習におけるストレスサーとストレスコーピングに関する研究 ● 体育授業における ASE の効果について ● 森のようちえん活動が幼児の運動能力に及ぼす影響 (実践発表) ● わが国におけるリープ・ノード・トレイスのこれまでの取り組みと今後の展望について ● 知的障がい者に対する日常生活に変化を作り出す地域生活支援～ユニバーサルキャンプを通して～ ● チャレンジキャンプ 2015～リヤカーで小豆島一周110 kmの旅～ ● 千葉市少年自然の家主催事業「セブendays キャンプ」の実践報告 ● オフザピッチトレーニングとしての雪上野外研修プログラムの実践 ● 保育内容研究としての自然・生活・あそび ● 大学授業での長期バックカントリーキャンプ ● ろう・難聴の子どものキャンプに参加した聞こえるスタッフのふりかえり～デフキッズキャンプの実践から～ ● 町田ゼルビアにおける自然体験活動の実践報告 ● 2015年多摩の自然学校 ● 無人島キャンプの実践 ● 米国大陸横断体験記
[ワークショップ発表] ● キャンプで美味しい！コーヒーの入れ方教室 ● フィールドワーカーのための危険生物「ハチ」「ヘビ」対策セミナー & 交流会 ● 私たちはリスクに対する説明責任をどう果たすのか How do we achieve accountability for risk? ● 環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」を体験してみよう
[講演会] つなかりを生み出すインプロ(即興演劇)

■ Camp Meeting in Japan 2017 ー第21回日本キャンプミーティング(2017/6/10、国立オリンピック記念青少年総合センター)
[ポスター発表](研究発表) ● キャンプにおけるボランティアマネジメントの日本と海外の比較調査 ● キャンプにおけるふきだし法の有効性について ● スペシャルニーズキャンプへのボランティア参加による知的障がい者に対する態度変容 ● スペシャルニーズキャンプの学生ボランティアにおける自己効力感の変化 ● 大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ ● わが国の冒険教育の動向から探る現代的課題について (実践発表) ● キャンプにおけるバーベキュー食材の新たな有効性 ● 森の幼稚園など自然保育にキャンプの知識と技術をどのように活用するか ● 少年サッカークラブを対象とした継続型キャンプの実践事例 ● 第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会(AOCC2016) 報告 ● 大学間交流スキーキャンプの取り組み (団体紹介) ● スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク ● 「出会いと体験の森へ」実行委員会 ● 北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっふ」

[ワークショップ発表] ● 組織キャンプにおけるチャイルド・プロテクションについて ● YMCA 三浦ふれあいの村防災ウォークラリーの取り組み ● ハチ・ヘビ・マダニ・ヤマビル・毛虫 etc…危険生物を楽しく学ぶ 野外教育者のための危険生物クイズ大会！ ● キャンプでのクラフト ● 「違いを祝福し、違いを喜ぶ。」キャンプロイヤル体験報告 ● 「アイスブレイク十人十色 ～みんなの十八番、大交換会！～」
[講演会] 自然と手を入れた自然(園芸)の中で～人を育てる野菜作り～

■ Camp Meeting in Japan 2018 ー第22回日本キャンプミーティング(2018/6/9、国立オリンピック記念青少年総合センター)
[ポスター発表](研究発表) ● アウトドリーダースHIPに関する文献研究 ● 危険な動植物の識別に関する研究 ● 大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ(第2報) ● 青少年教育施設における指定管理者制度導入の状況と課題 ● 参加児童生徒のもつ組織キャンプ経験の自伝的記憶 (実践発表) ● 森の幼稚園など自然保育における野外活動の知識と技術の実践 ● こども英語教室ラボ・パーティファミリーキャンプ実践報告 ● キャンプファイヤーにおける民俗芸能のレクリエーションとしての活用 ● キャンプ指導者向けのスノーキャンプ・スキーイベントに関する研修事業の試み ● 第11回国際キャンプ会議 Sochi・Russia と ICF の活動の報告 ● 西表島 LNT プロジェクト (都道府県キャンプ協会取り組み紹介) ● Enjoy Camping! キャンプを楽しむたっぷり学ぶ(東京都) ● 静岡県キャンプ協会(静岡県) ● 持続可能な協会運営の知恵と工夫愛知県キャンプ協会のとりくみ(愛知県) ● 近畿ブロックにおけるビジョン 2020の実施状況(近畿ブロック) ● 広島県キャンプ協会の取り組み(広島県) (団体・活動紹介等) ● スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク ● 北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっふ」
[ワークショップ発表] ● 目からウロコの SAM スプリット固定法 ● 誰でも手軽に自然体験活動が指導できるアウトドアゲーム ● 「アイオレシート」の紹介 ● 企画博覧会『ヒアリとその他の危険生物展』& 危険生物お悩み相談会 ● アウトドアメーカーが直接紹介する最新キャンプグッズ(提供:ロゴスコポーレーション)
[講演会] うんこはごちそう～人と自然の共生は野糞から～

■ Camp Meeting in Japan 2019 ー第23回日本キャンプミーティング(2019/6/8、国立オリンピック記念青少年総合センター)
[ポスター発表](研究発表) ● 大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ(第3報) ● 国際的なキャンプのムーブメントをさぐる-International Camping Fellowship の活動の分析から- ● 指定管理者制度導入に伴う都道府県・政令指令都市設置のキャンプ場における公費負担に関する研究
[ポスター発表](取り組み発表) ● 障害者支援施設でのキャンプ実践 ● キャンプディレクター2 級養成講習会について-東京都キャンプ協会の事例から- ● 第7回大学間交流スキーキャンプの報告-その価値と今後に向けて- ● 高校サッカー部新入生を対象とした2年間の ASE キャンプの実践 ● 次世代野外教育指導者団体「えぞっふ」による北海道キャンプフェスタの取り組み ● キャンプ指導者を対象とした研修事業の実践～東京都キャンプ協会の試みから～ ● 南郷山天幕生活をふりかえる～日本 YMCA キャンプ 100 周年～ ● 大和川を 20km 歩くキャンプ-小学 2 年生にどこまで任せるか?-
[特別企画] ● NPO のための弁護士ネットワークによる無料法律相談会 ● 日本キャンプ協会指導者養成よろず相談所
[展示] ● ロゴス商品展示
[展示体験] ● 野外キャンプ活動は防災活動の基本である
[授業] ● 野外教育史[招待授業] ● 防災減災教育論 ● キャンプと法律(入門)
[招待授業] ● キャンプ推理学(歴史編) ● 外国人・留学生を対象とした引率方法論 ● キャンプの安全マネジメント ● 自然体験活動における絵本活用法 ● 組織キャンプにおける大学生カウンセラーの在り方とこれから
[特別講和]
= 令和時代の新しいキャンプに向けて =
昭和・平成時代の「野外」の変遷とこれからのキャンプに期待すること

※ Camp Meeting in Japan 2006 - 第 10 回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010 - 第 14 回日本キャンプ会議までの
発表抄録集は『キャンプ研究』（毎巻第 1 号）として 編集されています。

※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集／日本キャンプミーティング抄録集』は有料で頒布いたします。ご希望の方は、日
本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

- ・『キャンプ研究』 各 1,000 円（税・送料別）
- ・『日本キャンプ会議抄録集』 各 1,000 円（税・送料別）

なお、以下の号は完売しました。

- ・『キャンプ研究』第 2 巻、第 4 巻第 1 号、第 12 巻第 3 号
- ・『キャン会議抄録集』第 1 回～第 5 回

第24回日本キャンプミーティング実行委員

委員長	野口 和行（慶應義塾大学）
委員	熊澤 桂子（東京教育専門学校）
委員	中丸 信吾（日本女子体育大学）
委員	渡邊 直史（プラムネット株式会社アウトドア共育事業部）
委員	佐藤 冬果（筑波大学大学院）
事務局	高橋 宏斗

第24回日本キャンプミーティング - 第4回オンラインミーティング - Camp Meeting in Japan 2020 - 4th Online Meeting -

抄録集

2021年6月3日発行

発行所 公益社団法人日本キャンプ協会
National Camping Association of Japan

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

国立オリンピック記念青少年総合センター内

TEL 03-3469-0217

FAX 03-3469-0504

E-Mail ncaj@camping.or.jp
